

活動報告書①

報告者氏名：原田友加、村上光輝

所属：福島県立石川養護学校

記録日：平成26年2月28日

【対象生徒（群）の情報】

- 学年 高等部1学年 女子
- 障害名 知的障がい
- 障害と困難の内容

- ・言葉による指示で行動することができ、積極的に学習に取り組むことができる。
- ・やってみようという気持ちがあっても、自信のなさから体育的活動にマイナスイメージをもつことが多い。
- ・高等部に進学し、環境の変化による不安から、教師の注意を引くような行動（活動の場を離れたり、教師をつねったりする。）が多く見られている。てんかん、てんかんとは別に不安になったり、注意を引きたかったりする時に心因性のけいれん発作がおきることもある。

【活動目的】

- 当初のねらい

対象生徒Aは、中学部時には運動に対する取り組みは良好であった。しかし、学校以外で運動に取り組む機会もなかったため、歩き方や姿勢のバランスが崩れてきていた。2012年9月より地域の障がい者陸上連盟に登録し、陸上競技場での練習会に参加するようになった。

「少ない練習だけでは覚えられない。学校でもやってみよう。」という本人の希望もあり、以下の3点をねらいとし、活用を計画した。

- 1 障がい者陸上連盟との連絡ノートとして活用する。
- 2 フォームの動作解析を行う。
- 3 動作解析を学校生活全般において応用する。

活用を図る中で、運動のイメージ作りや上達が視覚的にわかる支援（映像分析、動作解析）をすることで、部活動や競技会へも積極的に参加するようになり、学習効果や社会参加が推進されるのではないかと考えた。

- 実施期間 2013年5月13日～2013年7月19日
- 実施者 原田友加、村上光輝、渡邊美穂、加茂敬、渡邊幸治、深谷奈々、阿部昌弘
- 実施者と対象児の関係

地域支援センター：原田友加、保健体育科：村上光輝、保健体育教科担当：加茂敬、渡邊幸治、渡邊美穂
学級担任：深谷奈々、情報教育担当：阿部昌弘

【活動内容と対象生徒（群）の変化】

- 対象生徒（群）の事前の状況

- ・高等部に進学し、環境の変化による不安から、教師の注意を引くような行動（活動の場を離れたり、教師をつねったりする。）が多く見られるようになった。てんかんとは別の不安になったり、注意を引きたかったりする時に起きる心因性のけいれん発作が入学当初、下校時におきた。
- ・予定していた自力通学を見合わせ、保護者の送迎により登下校するようになった。
- ・保護者から活用するにあたって、セキュリティー面に不安があるとの話を受け、情報教育担当者より、フィルタリングの設定について情報提供してもらう。
- ・本人の体調が落ち着かず、チックのような症状も見られるようになったため検査入院をすることになった。
- ・本人の状態や家庭の事情により、地域の陸上教室へ行くことはやめてしまった。

○ 活動の具体的内容

・本人が学級を基盤とした高等部生活に慣れること等を第1に考え、担任と相談しながら、活用は見合わせ様子を見た。

・「Lesson pad」や「Ubersense」を候補として挙げ、運動動作で活用できるアプリの検討を行った。iPadの活用のテーマとしては、動作の再現性を確認することで生徒ができたという実感をもてるような取り組みについてという観点で検証することとした。

【Ubersense】



< 2画面表示 >



< 重ねて表示 >

● 対象生徒（群）の事後の変化

対象生徒の情緒が不安定だった1学期間は担任が中心となって本生徒にかかわり関係を築くことを大切に、活用については見合わせた。その後も体調が落ち着かなかったことや2学期に行われる県内の特別支援学校スポーツ大会参加に向けても消極的であったため、実践については対象グループを変更した。(活動報告書②による)

【今後の見通し】

今回の実践では、当初予定していた対象生徒に限定しての「地域の陸上教室での活用」については実施できず、残念であった。しかし、対象者を変更しての実践では、視覚的に振り返ることで生徒たちにとっては「自分がどのように動いているのかが分かりやすい」ということが分かったので、今後、対象生徒が視覚的なスポーツ支援により、運動への取り組みに自信をもち、再び地域の活動への参加にも積極的になることを期待している。

運動に苦手意識のある生徒にも、運動に興味をもったり、動作の再現性を高めたりし、できたという達成感を味わわせることができるような、効果的な視覚的支援の検討を継続していきたい。

活動報告書②

報告者氏名：原田友加、村上光輝、渡邊美穂 所属：福島県立石川養護学校 記録日：平成26年2月28日

【対象生徒（群）の情報】

- 学年 高等部1～3年
- 障害名 知的障がい
- 障害と困難の内容
 - ・言葉による指示で行動することができる。
 - ・比較的、身体を動かすことが好きな生徒が多い。
 - ・ボールを投げる際、ボールを持つ手と踏み出す足が同じになったり、遠くに投げようとするとき大きく体のバランスを崩したりする等、動きにぎこちなさが見られる生徒もいる。
 - ・運動場面で自分がどのように動いているかをイメージすることが難しい生徒が多い。

【活動目的】

○ 当初のねらい

運動のイメージ作りや上達が視覚的にわかる支援（映像分析、動作解析）をすることで、運動動作を獲得しやすくなるのではないかと考えた。できたという実感を積み重ねることで自信を付け、運動への取り組みや競技会等への参加が積極的になり、学習効果や社会参加が推進されるのではないかと考えた。

- 実施期間 2013年7月19日～2013年12月25日
- 実施者 原田友加、村上光輝、渡邊美穂、加茂敬、渡邊幸治、阿部昌弘
- 実施者と対象児の関係 地域支援センター：原田友加、保健体育科：村上光輝、情報教育担当：阿部昌弘
保健体育教科担当：加茂敬、渡邊幸治、渡邊美穂

【活動内容と対象生徒（群）の変化】

○ 対象生徒（群）の事前の状況

- ・運動部（バスケットボール部、サッカー部）に所属する生徒が多く、比較的、体を動かすことは好きである。
 - ・指示された内容が理解できても、自分がどのように動いているのかイメージすることが難しい生徒が多い。
- (例)

■バスケットボール

「相手にフェイントをかけるためにはどうしたら良いか？」

「相手の前で逆方向に体を動かしたり、大きくボールを動かしたりして、相手の注意を引きつけると良い。」ことは分かる。

→しかし、自分では大きくボールを動かしていると思っても、実際には腕が伸びていないので、十分な動きとはいえない。



■バレーボール

「アンダーパスで気をつけることは①膝を曲げる。②肘を伸ばす。③体の正面でボールを受ける。」というポイントは分かる。

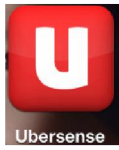
→しかし、実際には体の横でボールを受けたり、膝が伸びた状態で腕だけ振ってボールを飛ばしていたりする。



○ 活動の具体的内容、対象児の事後の変化

運動場面で利用できる「Lesson pad」や「Ubersense」を候補として挙げ、運動動作で活用できるアプリの検討を行った。

【Ubersense】



< 2画面表示 >



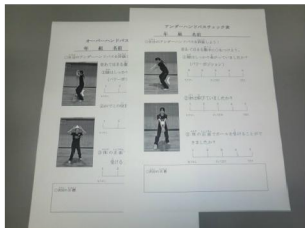
<重ねて表示>

1 保健体育の授業（球技「バレーボール」での活用）

(1) パスのフォームの確認、テストの自己評価



グループ毎の活用



ワークシート

■基礎練習（オーバーハンドパス、アンダーハンドパス）時に、注意するポイント（①膝を曲げる。②肘を伸ばす。③身体の正面でボールを受ける。）を示し、グループ毎に練習した。1人ずつ撮影して自分で確認したり、ワークシートを用いての振り返りの際の確認資料にしたりした。



自己評価時に、自分の画像とワークシートの模範を見比べたり、注意するポイントができていたかどうかを見て確認したりしたことが、生徒にとって分かりやすかった。自分から達成度についての発言が見られ、「見て分かる」ことが確認できた。

(2) ゲーム中の動きの確認等



ゲーム場面での活用

■基礎練習で取り組んだ動きができていないか、ゲーム中の声のかけ方や動き方はどうだったか等、各グループ毎に確認しながら取り組んだ。



ゲーム中の自分の動きや友達の動きを客観的に見て確認できたことが、生徒にとって分かりやすかった。確認したい場面を静止したり、繰り返し流したりすることで、お互いに意見を言いやすくなり、生徒の主体性が見られるようになった。

2 部活動（バスケットボール部）

(1) シュート時のフォームの確認



2画面表示



重ねて表示

■ Ubersense を使って、「①ボールを手から離す時の位置②リリース後の腕の角度③リリース後の指先方向」の3点について、シュート場面を良かった時、悪かった時の2画面を重ねて表示し見比べた。



良くできた時、うまくいかなかった時に、どこが違ったのかを目で見て確認し、その後、実際に動いて体感したことで、自分の体がどう動いているのかイメージがもちやすくなったと思われる。

(2) 1対1やゲームでの動きの確認



ディフェンス練習



ゲーム中の動き

■ 動画で記録し、注意するポイントについて画像を見ながらその場で確認し、再度実践する。弱点の修整（背の低い選手は背の高い選手に近すぎるとシュートを打ちにくい→リングから離れた位置から素早くシュートを打つ等）や戦術の確認（ゾーンディフェンスの位置取りや声のかけ方等）をした。



練習や練習試合のタイム間に、実際に動画を見て確認した。随時確認できたことで、修整点が意識しやすくなった。また、試合中に自分がどのような動き方をしているかということだけでなく、「声をかけ合った方が良い。」「ディフェンスに戻るのが遅い。」等、意見を言い合う積極さが見られた。

【報告者の気づきとエビデンス】

○ 主観的気づき

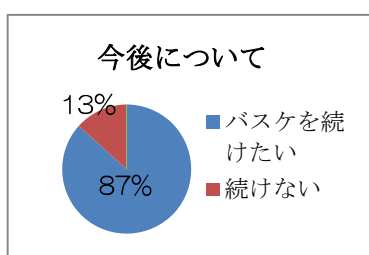
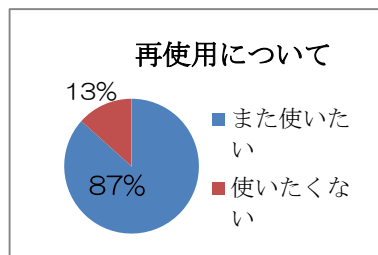
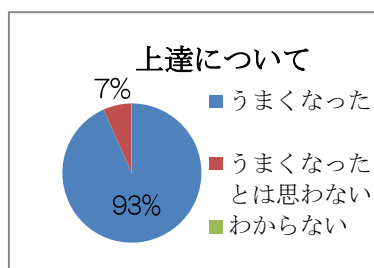
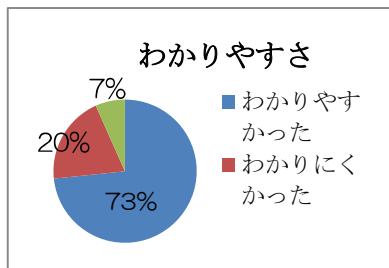
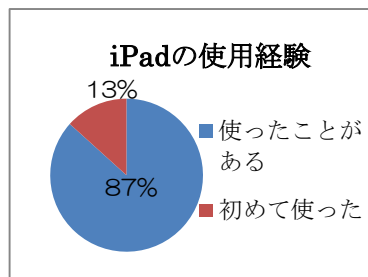
機械が苦手という生徒もいたが、多くの生徒はタブレット端末（iPad）自体に興味をもっていたため、実際の操作にも積極的であった。保健体育の授業では、事前にポイントを明確にし、掲示しておいて見比べる方法を取り、部活動ではUbersenseを使って画面上での見比べを行ったが、どちらも実際に言葉だけでなく視覚的に確認できる点が有効であった。自分がどのような動きをしているのかイメージすることが難しい生徒には、自分の動きを確認できることが効果的であったと考える。実際に、画像を見た後に考えたり工夫したりする場面が見られた。また、模範と比較し修整する点が明確になることも解りやすさにつながった。

実際、効果測定としてシュート場面の画像を比較してみると、生徒の気づきがシュートフォームに角度の違いとして現れた。しかし、身近にiPadが無いことから、操作に抵抗を感じる生徒もいた。また、どう動けば良いのか分かっていても、実際にその様に動けずに諦めてしまうこともあった。



○ 気づきに関するエビデンス

バスケットボール部員15名にアンケートを実施した。



■ 「わかりやすさ」

- ・シュートフォーム等の自分の動きを確認できた。
- ・先生に言われたことができているか確認できた。

■ 「再使用について」

- ・自分ができているか分かりやすい。・自分の動きを確認したい。・面白い。欲しい。

■ 「上達について」

- ・体力がついた。
- ・シュートが入るようになった。ドリブルが続くようになった。
- ・ディフェンスがうまくなった。→技術面での上達を実感する生徒が多く見られた。

■ 「来年もバスケットボールを続けたいか？」

- ・うまくなったから続けたい。優勝したい。
- ・もうやりきった（後輩に任せたい）。

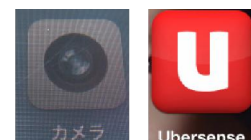
→ iPadの活用により生徒のバスケットボールに取り組む主体性を引き出すことができたと思われる。

【今後の見通し】

今回の実践をとおり、運動動作の獲得場面において、言葉だけでなく「視覚的に確認できる点」が有効であり、グループ毎の活用場面では「モデルを共有できる点」が効果的であったことが分かった。

今回、使用したアプリ（Ubersense）は、音声を入れて動画として保存することが可能なため、生徒の認知に合わせて段階的に対応することや、教員がチームとして動画の管理をするためにタグ付けて整理する等の「データの管理」をしていくことで、情報の共有化が図られるのではないかとと思われる。

また、運動場面で自分がどのように動いているかをイメージすることが難しい生徒にとっては、カメラで撮影した動画を見て、自分の動きを確認したことは、動きをイメージすることへの手助けになったと考える。その様な場面では、自分の動きや相手の動きに対しての考えを発言する積極さが見られた。



技術の上達が全てではないが、「できた」という実感から、運動への取り組みや大会・地域スポーツへの参加に繋がっていき、余暇活動への拡がりに発展することが期待されるのではないかと考える。